

米国の幼児教育における五つの実験(十一)

——オープン・エデュケーションの公教育への導入実験——

大戸 美也子

はじめに

一九六〇年代の半ばから七〇年代のはじめにかけて、政府主導ですすめられてきた福祉と教育あるいは保育を一体化する運動は、特定の社会階層の子どもたちを対象とする「補償教育」という分野を独立させ、それを公教育の中に定着させる働きを果たしてきた。この運動に費した経費、参加した子どもや大人の数、またこの運動のために開発されたプログラムや研究の数、そして専門誌や一般雑誌、新聞紙上を賑わした教師や専門家、行政官や政治家あるいは一般の人々の主張や提案や議論の数は、実に莫大なので、この時期は「補償教育の時代」と呼ばれるにふさわしい

ものであった。この運動は、基本的に一部の子どもたちの教育であったが、公教育の中で「恵まれぬ環境にある」子どもたちのための教育が進展している間に、「すべて」の子どもたちのための公教育改善運動もまた同時に進行していたのである。しかし、後者の場合、そのための特別の予算も、町や郡や州の教育行政者や政治家による派手なキャンペーンもなかったから、ごく限られた人々の中、しかし熱心な啓蒙活動を通して、これまたごく限られた教室の中で試行錯誤しながら展開していたのであった。教室内のひとりひとりの教師による小さな努力が集まって流れを作り、さらに類似した努力が合流し合い、やがて大きな教育運動の流れをなして公教育の主流に流れこんでいく過程は、文字通り流れを連想するものがある。川の流れがそうであるように、この運動もその過

程で何度か名称を変え、今日ではオープン・エデュケーションという名前で国内はもとより国外にまで知れわたる大きな教育運動のうねりとなってきた。このうねりの特性、中心を把握するためには、この運動の発生と拡大にかかわってきた諸要素を検討し、全体を展望する必要がある。本稿では、はじめにオープン・エデュケーション運動の形成過程をみてから、この運動の原理と実際、そして問題点について論じていくことにする。

一 米国におけるオープン・エデュケーションの発生と展開

この運動のきっかけを作ったのは、マサチューセッツ州の教師ハル(Hall, 1964) および彼の属していた教育発達センターの、特に基礎科学研究部門の同僚たちであった。一九六一年、ハルはイギリスのレスター大学の教授が著わした数学の教授法に興味を持って、その実際を見学するためにレスターシャーにおもむいた。そこで彼がみたものは、子どもが自由に課題を選び、自由に教室を移動し、自由に教師や仲間と話し合って熱心に課題と取り組んでいる小学校の授業風景であった。それは、教師主導、教科書中心、沈黙重視の米国の公教育の実態とは異なり、直接経験を

通して自分で発見し、自分のペースで学習する、つまり彼自身が理想としてきた学習の姿であったのだ。今日、インフォーマル・エデュケーションとして知られている英国のこの授業形態に深く感動して帰国した彼は、熱烈な英国のニュー・スクールの信奉者となつて、国内にこれを伝播する活動をはじめるのである。

イギリスでの旅行体験を基盤にはじめられた個人的な公教育改善運動が、オープン・エデュケーションのそもそものはじまりとすることができる(Baith, 1972)。その後、十五年間の間に、もっと盛んなイギリス紹介の時期、国内における実験的試行の時期を経て、定着の時期あるいは反正対に反動の時期を同時に迎えている。それぞれの時期の具体的な動きについて、次に簡単に述べてみよう。

(1) イギリス紹介の時期

イギリスの小学校、特に低学年(インファント・スクール)で次第に優勢になってきたインフォーマル・エデュケーションの思想と実践の紹介・伝播の窓口になったのは、ハルの属していた教育発達センターである。特に六〇年代の前半には、このセンターのスタッフによる英国はレスターシャー、オックスフォードシャ

あるいはプリストルでの数学や科学の新しい授業形態についてのドキュメントが、英国で進展しつつある個人に焦点をあてた新しい教育運動を知る唯一の情報源であった。同センターは、情報を取り次いだだけではなく、両国間の教師の交流の手助けもおこない、米国の教師には前述の三つの地域の学校見学を斡旋する一方で、英国のインファント・スクールの教師あるいは教員養成を担当している専門家を米国にまねいて、講演会、実習訓練などを主催したりした。この頃は、インフォーマル・エデュケーションとか、インテグレイテッド・デイとか、フリー・スクールとか、あるいはレスターシャー・プラン等さまざまな言い方でこの新しい教育運動をよんでいた。

教育発達センターの活動は極めて熱心であったが、その及ぶ範囲は、主としてニューイングランド地方に限られ、広大な米国全体からみれば実にささやかな活動でしかなかった。英国の新しい教育運動を、もっと広範囲の人々にあるいは地域に伝えたのは、一九六七年のブローデン報告書であった。

ブローデン報告書

一九六七年に刊行された、英国中央教育審議会の、政府に対するこの答申書については、周知のことであるし、専門書（小川、

一九七〇、七五）にもその内容の紹介があるので、ここではこの報告書の全体的な特徴と、英国におけるインフォーマル・エデュケーションの系譜の部分の紹介にとどめることにする。

この報告書の主旨は、その正式な名称に端的にあらわされているように、「児童と彼らの初等教育」(Children and Their Primary School)を具体的に提案することであった。初等学校が教師のものでもなく、教育行政者のものでもなく、政治家のものでもなく、「子どものため」の学び舎であるために、中央教育審議会が支持し、全英の初等学校に採用するよう奨励したのが、インフォーマル・エデュケーションであった。「学校」というものについて、報告書は次のように明記している。

「学校は単なるティーチング・ショップではない。価値と態度を伝えなければならない。子どもたちが、何よりも子どもとして、未来の大人としてではなく、生活することを学ぶコミュニティーである。家庭ではあらゆる年齢の人々と生活することを学ぶが、学校は子どもたちのためによく考えられた適正な環境が設定され、自分自身になることを許し、彼らに即した方法と速度で発達するよう用意されている。機会を均等化し、障害を補う試みをおこなう場でもある。個人的な発見、直接経験そして創造的な仕事の機会が、特に強調されなければならない。知識というもの

は、バラバラに分割したのではなく、仕事とあそびも相反するといふより相補うものであることを主張するものである。教育のあらゆる段階でこのような雰囲気の中で育つ子どもは、やがて調和のとれたそして成熟した大人になろうし、彼がその一員をなす社会にすみ、その社会に貢献し、そして社会を批判的にみることのできる大人になるといふ希望をいだいている」(第十五章五〇五)

このような学校観は、今世紀のはじめ(一九〇五年—明治三十七年)文部省がはじめて刊行した教師の処遇助言のハンドブックにみられることを、第十六章の「カリキュラムの自由に向かつて」という項目の所で述べている。

英国では、それまで教師の給料は「出来高払い」制がとられていて、学期末に視学官のおこなう期末テストの子どもの成績で給料の額が決められたという。一九〇五年にこれが是正されると同時に、文部省の教育介入も大幅に修正された。一九一八年、フィッシャー教育法で知られている初等教育法成立以来、「文部省が、公的初等教育の教授で実現を望んでいる唯一の画一制は、ひとりひとりの教師が、各学校の特別の要求と実情に最も合致した、また最も有効である教授法を自分で考え、自分で実行することである。実践上の細かい点についての画一性は、たとえそれで何かが得られようと、望ましいことではない」という基本方針が、現

行法まで順守されてきたという(第十六章六〇八)。

こういふ法案があつても、「伝統の力と教育者に固有の保守性が、変化の速度をよわめてきたし、グラマー・スクールの受験準備もまた、画一性に大きな影響を与えてきた」このような状況の中で、ナースリー・スクールやインファント・スクール(小学校低学年)で少数の教師が実行してきた自由をとり入れた教育が発展してきたのは、決してルソーやペスタロッチやフレーベル等の教育思想家の原理ではなく、視学官の働きであると主張している。彼らの弁によれば、「これら思想家の著作が(この運動に)影響を与えたかどうか疑わしい。教育理論の本をよむために時間をさいてきた教師は殆どいないし、彼らが教育学部の学生時代だってそうであった」と断定しており、この報告書作成過程における視学官の発言力が推察される。この他に、二つの大戦をはさむ間にマクミラン姉妹によって普及されたナースリー・スクール運動、一九三〇年代(昭和初期)の体育、芸術における自由表現活動の発展、また第二次世界大戦中の学童疎開などが、インフォーマル・エデュケーションの発達系譜に位置づくべきことである。特に戦時学童疎開は、一クラス一担任制、学年制、教室内活動といふ伝統的な学校の型から子どもと教師とを解放させたと指摘している。

ブローデン報告は、イギリスの初等教育のあるべき姿をはっきり提示しているばかりでなく、その根拠から実践への方途まできわめて具体的に記してあるため、まさに教育実践の指針として現職教育者に広く読まれていることを、米国の教育学者エイスマン (Eisner, 1974) は、次のように伝えている。

「……ブローデン志向型の学校を訪れ、応接室に通されると、まず目につくのは二、三の教育雑誌と並んで修理に修理を重ねたブローデン報告書であった」

米国におけるブローデン報告書

この報告書は、一九六八年の夏から秋にかけてフェザーストーン (1967) によって、『ニュー・リパブリック』誌を通して米国の大衆に紹介された。彼の「英国における初等学校の改革」という一連の記事は、米国の形式化した学校教育に不満をいだき、改革の道を模索しはじめていた教師や親を刺激し、教育の改革の気運を高める役割を果たした。この報告書への信頼感は、その後ひきつづいて出版された二冊の本によって一層強化された。一冊は、報告書作成者の一人でもあった視学官ブラッキーの著わした『初等学校の内側』であり、もう一冊は、インフォーマルな教育実践で名高いレスターシャー郡の女校長ブラウン等のまとめた実

践報告『初等学校における統合学習』である。前者は、英国の小学校が労働階級の子弟のために安上がりな教育をするために、少し詰め教室（五十名から六十名）で読み、書き、算術の教授を中心として始まったが、百年の歴史の間にゆっくりとしかし着実に、自由を認め子ども中心の教育への道をたどってきた過程を跡づけ、さらに、インフォーマルな教育の中で学科目や宗教をどのように扱うべきかその基本的考え方について論じている。一方後者は、レスターシャー郡のシェラード幼児学校での実践を通して、いかに統合学習 (the integrated day) が展開しているかを、環境の活用、教師の役割、子どもの学習の姿にふれながら具体的に述べている。たとえば学校の環境の章では、学校をとりまく（自然、社会的）環境が生かされ、また室内には大工、絵画製作、劇あそび、数学、読書等の学習センターが十以上も設置され、物質的には豊かで、精神的には受容的で暖かい環境作りが実際に行なわれていることを生き生きと伝えている。ブローデン報告書とこの二冊によって、英国で着々と広まりつつある「子どものため」の学校の輪郭が次第にはっきりしてくると、英国詣に参加する教師も増大し、米国各地にこの教育の信奉者が拡大していったのである。

(2) 国内での実験的試行の段階

いよいよ国内での実験的試行がはじまるのは、一九六八年以降である。六〇年代前半から、英国のニュー・スクールの紹介所の機能を果たしてきたマサチューセッツ州の教育発達センターは、英国の教師の協力を得ながら「対話、クラス運営、時間と空間の解放 (openess)」と、「子どもと教師双方の」自己実現」を重視する「成長を継続させるプラン」(Continuing Growth Plan) というアメリカ型のインフォーマルな教育プログラムを開発した。このプログラムは、一九六八年度から本格的に始ったフォロースルー・プログラムの向上に役立つプログラムとして市民権を得て、公教育の中に正式に入ること許されたのである。初年度、公式には全米十個所でしかこのプログラムは採用されなかったが、すでにみたように、フォロースルーは国家主催のプログラム競争プロジェクトであったから、フォロースルー・プログラムとして選ばれたことだけで十分に全米の教育者の注目を得たのであった。しかも、このプログラムがようやく公教育に到達した六〇年代後半の教育界は、学生運動の拡がりと共に、公教育の非教育性、非人間性を内部告発する書物が続々と刊行され (例えば Dennisson, 1969; Kohl, 1969) 公立学校、特に都市のスラム街の学校改善がせまられてい

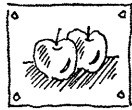
た時期でもあったので、人間的なインフォーマル教育が一種の改革モデルとして一層脚光をあびることになったのである。このような時期に、米国の公立学校の危機的状況をいくつも事例で示し、新しい学校の構想を英国のインフォーマルな教育によって具体的に提案し、さらに米国内でそれぞれ独立に開発され、試行錯誤をかえしていた類似したプログラムのすべてを組織的に紹介した一大教育ドキュメント『教育の危機』が刊行された。すぐれた教育ジャーナリスト、シルバーマンは、カーネギー財団の援助を受け、二年間にわたって英米各地の公立学校、ニュースクールを訪れ、「いかに米国の公立学校が、張りのない退屈きわまるものであるか、いかに抑圧的でくだらぬ規則でとりしきられているか、いかに知的にも、美的にも乾ききった環境であるか、教師や校長がいかに不遜であるか、いかに子どもたちを小馬鹿にしたあつかいとしているか」を数百の事例で告発し、「公立学校の主たる障害は、金の出し惜しみでも無関心や愚かさでもなく、それはまさに思慮のなさに基づくもの」であることを見出す。真剣に教育目的について考えなかったり、既成の方法を再検討しようとしていない、そうした思慮のなさを是正するために、彼はブローデン報告書にあるべき教育の目的をたずね、多くの英国のニュースクールの事例によって、その目的を達成するための技術、内容、機

構を示したのであった。そしてノースダコタのニュースタイル、ネブラスカのツソの幼児教育プログラム、あるいはフィラデルフィアの教師たちの学習センター等の例をひいて、米国内でも充分に教育改革の可能なことを主張している。しかしシルバーマンは、六〇年代の教育改革をゼロと評価する一方で、インフォーマル教育を過大評価したり、公家学校の悪い面だけが強調されていたり、あるいは語学教育、教員養成に断片的に英国ふうの教育哲学がみられるという理由で、まだ試行錯誤の雑多なプログラムを一括してモデル化している等、問題点もみられるので、これらを

さし引いて、このすぐれた啓蒙書のみていく必要がある。ただ六〇年代の教育改革が、外部から、上からできあいのプログラムを押しつけたために、現場の教師が離れていき、結果的には改革が不成功に終わったことを充分に自覚した上で、「学習形式の変革」を現場の教師によって力強くおしすすめるべきことを唱えた点は、高く評価されてよいし、この本の出現によって、ますますインフォーマルな教育を公教育の中に深く浸透させた貢献は特記されてよいものである。

(つづく)

児童園芸学



皆川 美恵子

春の三月号に紹介した浅山英一先生の児童園芸学の話は、何か参考になったでしょうか。

先生はよく、こんなことをおっしゃいます。世の中の三分の一の人たちは生まれつ

き植物が好きで、誰に言われなくても自分から種子をまいて植物を育て、楽しんでいゝ。もう三分の一の人たちは、こちらが植物のおもしろさ、美しさを示してあげてはじめて、植物に対する興味をおこし、植物

が好きになる。残りの三分の一の人たちは、いくら話しても興味を示さず、自分で種子をまいてみようとも思わない、この人たちは、「縁なき衆生」でどうしようもないのです。